

# はじめよう！世界の城下町彦根の未来まちづくり

彦根世界遺産シンポジウム 2009

—石見銀山協働会議の事例に学ぶ—

彦根景観フォーラムでは、平成21年6月13日(土)、午前10時30分から夏川記念館にて彦根世界遺産シンポジウム2009を開催しました。

午前は、石見銀山協働会議の“石見銀山スタイルのまちづくり”が紹介され、約100名の参加者と意見交換が行われました。午後は、千代神社、足軽屋敷辻番所、芹川けやき道などを巡りました。今回は、午前の討論の内容をお知らせします。

問題提起：滋賀県立大学 濱崎 一志 教授

## 「歴史まちづくり」から世界遺産登録へ



彦根城は、平成4年(1992年)世界遺産登録暫定リストに掲載されたが、その後は進展していない。

世界遺産への登録は年々厳しくなっており、彦根城の登録は城単独では困難であり、城下町彦根で申請する、姫路城の登録を松本、犬山をふくむ国宝四城に拡大する、琵琶湖を世界遺産にする一部とするなどの案が出されている。だが、とにかく世界遺産に登録できればそれでいいのだろうか？

### ● 「歴史まちづくり」から世界遺産へ

彦根では、平成21年1月に歴史まちづくり計画が認定され、歴史的建造物の再生が始まった。今後の「歴史まちづくり」には住民と行政の協働が必要だ。

石見銀山は、街道や町並みも含めて世界遺産になった点で、彦根に似ている。協働会議の取り組みを学び、住民と行政がともに未来を語る場が必要ではないか。

そうして「歴史まちづくり」を進めた結果、世界遺産が実現できると考えるべきだ。

大田市石見銀山課 遠藤 浩巳 氏

## 「石見銀山」の価値と登録への歩み

### ● 世界遺産の構成と価値

「石見銀山遺跡と文化的景観」は、①銀鉱山跡と銀山町(大森重要伝統的建造物保存地区など)、②石見

銀山街道(鞆ヶ浦道、温泉津沖泊道)、③銀の積出港と港町(鞆ヶ浦、沖泊、温泉津重要伝統的建造物保存地区など)の3つで構成されている。

石見銀山の普遍的な価値は、

- ① 世界的に重要な経済・文化交流を生み出したこと
- ② 伝統的技術による銀生産方式を豊富で良好に残していること
- ③ 銀の生産から搬出に至る全体像を不足なく明確に示していること

特に③が「文化的景観」として保全すべきとされた点に大きな意味がある。

### ● 登録までの歩み

地元の大森町では地域活性化のため、全戸加入の文化財保存会が昭和32年から活動しており、昭和62年に重要伝統建造物群保存地区に指定された。平成7年に世界遺産にむけて県・市・町による合同調査を開始、平成13年に世界遺産暫定リストに掲載され、19年に国際記念物遺跡会議(イコモス)から登録延期勧告を受けたが、補足情報を提出し世界遺産委員会で登録が決定された。

石見銀山協働会議世話人 波多野 諭 氏

## 「石見銀山協働会議」の経験

石見銀山協働会議は、平成17年6月、「石見銀山を保存・活用し、地域振興を図っていける“石見銀山スタイル”のまちづくりを求め、住民と行政が同じ目標に向かって動くこと」を目的に設置された。

当時は、行政のめざす厳格な保存・保全と、地元大森町が求める地域活性化、民間資本の観光開発で、期待と不安が交錯していた。



(右)石見銀山協働会議世話人 波田野 氏、(左)大田市石見銀山課 遠藤 氏

そこで、市役所の石見銀山課が事務局となり、東京大学大学院西村幸夫教授をアドバイザーとして、市民から



100人の会  
員を募集し  
た。ところ  
が、200人  
もの応募が  
あり、全員  
でスタート  
した。

### ●石見銀山行動計画

目標は、①石見銀山はどんな姿がふさわしいのか、②どんな形で次世代に伝えていかなければならないか、③そのために、行政、地元、民間でどのような役割を分担しなければならないかを決めた「石見銀山行動計画」を平成18年3月までに作成し、翌年度から実行することだった。

10ヶ月間で、全体会4回、「受入」分科会15回、「活用」分科会16回、「保全」分科会15回、「発信」分科会15回、分科会を運営する世話人会12回、現地を見学するフィールドワーク6回を実施した。

### ●いま、協働会議は

世界遺産登録後、石見銀山を訪れる観光客が急増した。しかし、協働会議で、まちづくりのめざすべき姿とルールを決め、きちんとみんなで話し合う仕組みを作ったことから、住民には「自分たちの町はこうするんだ」という自信がうまれている。

行動計画に基づき、行政は、ガイダンス施設や郊外での駐車場の整備などで「パーク&ウォーク」を実践。地域住民は、マナー向上などの石見銀山ルールの徹底、空屋への出店者は「自治会に入る、地域行事に参加する、地域に住む、県外資本は断る」という地域ルールが遵守されている。観光ガイドは、ボランティアからすべて有料ガイドに移行し、レベルが上がった。

### ●石見銀山スタイルのまちづくり

石見銀山は、鉱山遺跡と自然と暮らしが一体となって価値をもつ。この価値を理解し伝える、守り育む、活かし高める、来訪者と共有することで仲間が広がる。それで一層石見銀山の価値を高めていける持続可能なまちづくりを「石見銀山スタイルのまちづくり」と呼んでいる。

アドバイザーの西村幸夫教授は、協働会議としての「石見銀山スタイル」は、遺産登録の原動力であったし、これからの行動の指針である。今後は、各分野の調整を行いながら、どう展開させていくかが課題である



が、自信をもってやってほしい」と述べられている。

### ●彦根へのアドバイス

石見の場合は過疎が背景にあり、地域の利害関係の調整は少なかった。彦根は、まちなかに歴史遺産があり、人口も多く多様な生活者がいる。石見でできたから彦根でできるとは限らない。

ただ、どの地域でも自分たちの住む地域のすばらしいものを未来に伝えていく責任がある。壊してしまっ  
ては未来に伝わらない。

### 討論 彦根歴史まちづくりと市民の協働

進行：山崎一眞 NPO 彦根景観フォーラム理事長

事例報告を受けて、参加者全員で討論をした。その概要を報告します。

世界遺産の観光地化が各地で問題となっている。まちづくりの主体が不明確な（各主体が個別バラバラで取り組む）ため、遺産の保存と住民生活の改善と来訪者の満足が対立して、まちづくりが停滞してしまう。

一方、石見銀山のケースでは、まちづくりの活動母体となる協働会議が結成され、めざす姿の統一と必要なルール、役割分担が明確になるため、多くの協力が集まり、まちづくりが進展する。

### ●協働会議からはじめよう

彦根でも、歴史的建造物の整備が始まった。歴史遺産を守りながら暮らしや文化・経済を向上させるには、行政、市民、産業界がなにをどうすべきなのか、いまだその役割分担が不明確なままである。

広く市民プランナーを募集し、彦根協働会議を開き、行動を前提とした真剣な議論を積み重ねて彦根「行動計画」をつくろう。基金などの資金確保のしくみを築くことも必要だ。

石見銀山協働会議は、彦根の未来にとっても、希望を投げかけてくれている。

(文責：堀部栄次)